

市の荒廃ぶりと南部諸州における人種差別の実態は筆者に強い印象を残すとともに、アメリカ社会の抱える深刻な矛盾を示唆するものであった。今回のフィールド・ワークで筆者はできるだけ一般生活者の視点で、アメリカ社会の実情を捉えようと試みた。以下、筆者の目から見たアメリカ社会の、決して理想的とはいえない難い事象を報告したい。但し行動上の制約もあり、また実際危険で立ち入ることのできない区域もあって、これらの視点での報告は、旅行者としての立場からのものであることをお断りしておきたい。



写真13

アメリカの抱える深刻な社会問題を示す事象を一つ挙げよう。サン・フランシスコ市庁舎前の公園の一角に子供用の遊具が設置されていた。このエリアを囲む鉄柵には、「子供の同伴者でない大人は入場禁止」という看板が設置されていた（写真13）。



写真14

暴行や誘拐などで子供が被害者になるケースが増えており、その対策である。この公園のすぐそばでは街灯に少女の行方不明事件の公開手配書が貼ってあるのを見出すことができた（写真14）。社会における犯罪被害の凄まじさを垣間見させるものである。

ここまで深刻ではないが、アメリカの社会の問題点として目に付くのは次の点である。一般にアメリカの大都市は清潔とはいえない。地区によっては、路上に多くのゴミが放置されている。通行人の様子を見ても、ゴミを捨てる行為については意外に無頓着である。サン・フランシスコのパシフィック・ベル・パークの観客席には試合の後、観客による大量のゴミが残されていた（写真15）。かといって、アメリカの社会すべてがこうした行為に寛容であるわけでもないようである。シカゴのグラント公園で開かれた野外演奏会の会場では、終演後聴衆が各自のゴミを備え付けのゴミ箱へ片付ける光景を見ることができた。不特定多数の集まる公共の場所でこのような違いが出るのはなぜか。これは単なる「モラル」の問題だけで説明できるものではないように思われる。パシフィック・ベル・パークのように純粋に娯楽のための施設の場合、施設の清掃のための専門職員がいるからではないだろうか。そうした人件費も含めて、観客は入場料を支払っているという意識が見られるように思う。シカゴの野外演奏会の場合、会員席以外は基本的に無料である。専任の清掃スタッフがいな分、自分のゴミ処分は自己責任において行なわれなければならない。



写真15

注意してみると、アメリカの社会では至る所で、仕事と責任の分担が徹底されていることに気付く。ワーク・シェアの観念が社会に浸透しているのである。例えば、ほとんどのレストランでは従業員の役割が見事なまでに分担されている。入り口で客を迎え、テーブルに案内するスタッフ、各テーブルの給仕と勘定を担当するウェイター、そして食べ終わった食器を下げる係はそれぞれ別々である。基本的に、自分の担当以外の仕事に手を出すことはない。一見、これまで「個人主義」という言葉で説明されてきたことを示しているようにも見えるが、筆者にはこうした姿が、他者の仕事を奪ったり、また奪われたりすることに対して敏感な社会を示しているように思われたのである。



写真16

サン・フランシスコのフィッシャーマンズ・ワーフにあるホテル前で、従業員によるデモが行なわれていた（写真16）。

客室係の担当する部屋数が増やされることに抗議するものであった。こうした経営者の姿